

令和元年6月13日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16855

研究課題名(和文)近代ドイツ社会における細菌学説の拡散と変容 衛生博覧会運動を中心に

研究課題名(英文) Diffusion and Transformation of the Bacteriological Theories in the Wilhelminian and Weimar Germany

研究代表者

村上 宏昭 (MURAKAMI, Hiroaki)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：70706952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では衛生博覧会という展示イベントを中心に据えて、細菌学理論が社会に向けて発信されていくプロセスを分析した。その成果として、たとえば「衛生のアミューズメントパーク：ドレスデン国際衛生博覧会(1911年)の啓蒙戦略」(『歴史人類』第44号、2016年)では、専門知の啓蒙装置としての衛生博覧会においては、病気の患部を視覚的に再現するにとどまらず、来場者が実際にオブジェを操作して身体臓器等の動きをリアルに再現するという、体験型・遊戯型のオブジェも設置されていたことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、細菌学的知の普及回路の一端を明らかにできた点が挙げられる。従来の公衆衛生史研究は、科学者共同体内部での細菌学理論の確立か、当該理論に基づく公衆衛生政策の諸相を語るかのいずれかであり、その社会的普及過程は等閑視されてきた。それに対し本研究は、その普及過程を再構成する視座を提示できたと思われる。

社会的意義としては、科学的知が社会全体で共有されるメカニズムの一端を提示できた点にある。放射性物質をめぐる言説のように、現代は科学の言語であらゆる現象を語る時代である。専門知の社会的普及を分析する本研究は、そうした時代における科学と社会の関係性を顧みる一助となりうる。

研究成果の概要(英文)： I analyzed the German Hygiene Exhibitions held at the turn from the 19th to 20th century in order to reveal a way on which bacteriological theories spread to civil society during the Wilhelmine era. Its results were published in the article "Hygiene in Amusement Park" (History and Anthropology, vol. 44, 2016) and so on.

What I gained through research is the recognition that the Hygiene Exhibition displayed not only objects which were molded imitating visually the real diseased organs of human body, but also the mechanism of which did not work entirely until visitors caused to operate it.

研究分野：ドイツ近現代史

キーワード：公衆衛生 衛生博覧会 細菌学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

19世紀末のいわゆる「細菌の発見」と呼ばれる出来事は、公衆衛生の歴史研究ではいずれも例外なく最大のターニングポイントとして認められてきた。とはいえいうまでもなく、この細菌の発見がもたらしたインパクトの記述の仕方は、考察の重心をどこに置かかに応じて多種多様である。そこで、ここでは衛生史研究において考察の重心が置かれる局面を、【 】細菌の発見以前、【 】細菌の発見、【 】細菌の発見以後の三つに分類し、この分類に応じて研究動向を整理する。

【 】細菌の発見以前(現代への最終的転換点としての細菌学):この潮流では、19世紀以前の瘴気論的衛生観念を議論の中心に据えることで、細菌学の確立をもって叙述を終える研究が多い。その際、細菌の発見はそれ自体で現代的な衛生観念を出現させた出来事として位置づけられる。その反面、ここでは細菌の発見という出来事そのものや、当該社会における細菌学的思考の拡散過程が分析されることはない。

【 】細菌の発見(細菌学の構成主義):この潮流では科学社会学の見地から、細菌の発見という出来事に含まれる虚構性ないし「事実の構築性」を浮き彫りにしようとする研究が見られる。このように実験室の装置や科学者相互の交渉・連携・闘争等を経て病原体が構成される側面を強調して、細菌の素朴実在論を相対化させる試みは、現在なお国際的な広がりを見せている。だがこの潮流でも、細菌学的思考が科学者共同体を越えて一般社会へ浸透していく局面は、ほとんど考察されない。

【 】細菌の発見以後(民族浄化への連結):この潮流のおもな特徴は次の主張にある。すなわち、不可視の病原体に対する潔癖症的恐怖心と民族至上主義との結合から、20世紀に「民族体」の健康を脅かす異民族を根絶ないし排除しようとする欲望(民族浄化の心性)が芽生えたという主張である。本研究も細菌の発見以後に目を向ける点でこの潮流に与するものの、他方で民族浄化の心性が形成される以前、つまり細菌学的思考が社会に定着するまでの過程に分析の照準を当てる点で、この潮流とは区別される。

## 2. 研究の目的

以上のような研究状況を背景にしつつ、本研究は、近代細菌学の確立に伴い社会の衛生観念がいかなる変容を遂げたのか、その具体的な経緯を解明することを目的とした。18世紀末のヨーロッパで衛生観念が芽生えたとき、死に至る病をもたらすものとして最初に恐怖の対象となったのは、悪臭として知覚可能な瘴気であり、それだけに19世紀の公衆衛生事業でも悪臭の追放こそ清潔社会を実現するための第一条件とされていた。しかし19世紀末に細菌学が登場し、健康を蝕む真の脅威が身体器官では知覚不可能な微生物となって以降、公衆衛生事業のみならず衛生に関する社会全体の思考習慣そのものも、根本的な変容を余儀なくされたはずである。だがこの細菌学的思考は、いかなる経緯を経て社会の衛生観念を支配していったのか。言い換えれば、五感で探知できない存在者を病原体と見なす思考は、いかにして医学・衛生学の領域を越えて広く社会全体に拡散することができたのか。本研究はこうした細菌学的思考を通じた衛生観念の変容過程の解明を目指した。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するため、本研究は20世紀前半にドイツで花開いた衛生博覧会運動をおもな手掛かりとして考察を進めた。ドイツでは1911年のドレスデン国際衛生博覧会を皮切りに、1930年代に至るまで大規模な衛生博覧会が繰り返し開催されている。そのうち最も代表的なものとしては、1926年にデュッセルドルフで開かれた「健康増進・社会扶助・体育のための大博覧会」(通称「ゲゾライ」Gesolei)と、1930年に再びドレスデンで開催された国際衛生博覧会がある。当初はこれら三つの博覧会を中心に据えながら、細菌学的思考の「流通」と「消費」の歴史的位相を解明していく予定であった。具体的には、まず流通の局面では博覧会の展示内容だけでなく、その周辺の時代状況、たとえば細菌学と臨床医学の対立や民衆啓蒙の担い手・メディアの変化などに焦点を当てる。次いで消費の局面では、博覧会に関する報道・報告を手掛かりに、専門家の手で通俗化された知と一般社会の通念との齟齬、ならびに両者の変容の軌跡を浮き彫りにする、というものである。

## 4. 研究成果

ただし、研究の途中から上記の予定を変更し、20世紀初頭以降の少子化問題やウィルヘルム期に新たに登場した結核展覧会というイベントに分析の照準をシフトさせた。その考察を含めて、本研究の成果は以下のとおりとなる。

### (1) ドレスデン国際衛生博覧会における視覚型オブジェと体験型オブジェの並存

まず本研究による成果として、1911年に開催されたドレスデン国際衛生博覧会を考察した論者が挙げられる(雑誌論文)。ここでは、当時のヨーロッパで大きな反響を呼んだ同イベントの分析から、この時期の衛生啓蒙運動の特徴を浮き彫りにした。すなわち、万国博覧会をはじめ、博覧会方式は基本的に「視覚的享楽」を中心に置いたイベントであり、それだけに万博に関する従来の研究もその視覚性の強調に終始してきた観がある。しかしながらこの国際衛生博覧会で展示されたオブジェの中には、単純に視覚に訴えかけるものだけでなく、来場者による操作によって初めて作動するような仕掛けが施されたものもあった。つまり、見る主体(来場

者)と見られる客体(展示品)の相互作用という、「主客合一」によって成立する啓蒙の空間が用意されていたのである。この「体験型」ないし「遊戯型」のオブジェによって、ドレスデン国際衛生博覧会は大きな成功を収め、世界中で反響を呼び起こすことができたのである。このように当時の衛生啓蒙運動は、視覚だけでなく五感すべてを総動員した形で大衆の教化を図っていたといえる。

#### (2) 20世紀初頭における少子化問題と「スラヴの洪水」

とはいえ博覧会方式の基本理念が、五感の中でも特に視覚を重視するものであることに変わりはない。だからこそ20世紀前半の衛生博覧会では、ほぼ例外なく顕微鏡が展示され、それを覗けば生身の五感では認識不可能な病原菌を目視できるようにしていたのである。しかしこうした「不可視のものの可視化」という、近代的心性に特徴的な動きは、何も微生物というミクロの世界の存在者に限ったものではない。マクロの世界における「人口」という存在者、しかも物理的空間には存在しない純理論的な構成物ですら統計グラフ等によって目視の対象に据えられ、しかもそうした人口の姿も、衛生博覧会の中では統計地図やグラフの展示という形で公衆に披露されることになる。従って本研究でも、衛生啓蒙運動と平行してこうしたマクロの次元における人口動態の問題に焦点を当て、マクロの次元における「不可視のものの可視化」を考察した。

その成果として、20世紀初頭からドイツの人口学者の間で広がり始めた出生率低下への危機感と、東方のスラヴ民族への伝統的な恐怖心との独特な融合を考察した論考一篇を刊行した(雑誌論文)。当時のドイツの人口統計学者や社会衛生学者にとって、少子化問題は単にドイツ民族の消滅という事態を意味するわけではなかった。東隣のスラヴ民族は強力な出生力を示していたことから、やがて少子化で空洞化したドイツの国土に高い出生率で膨張したスラヴ民族が流入してくるであろうという、人口学的な根拠を基にした不安感が醸成されたのである。だが一方で、当時の人口学では少子化の原因を都市化と合理化という近代性に求め、前近代的な農業の再興を求める声が支配的であった。こうした農本主義的思考に照らすと、スラヴの高い出生率はまさに豊穡な穀物地帯の存在に起因するものとされる。そこから東方の「スラヴの洪水」をめぐる心性は、単にスラヴ民族を恐怖の対象にするだけでなく、出生率回復のモデルとしても機能するという、きわめて両義的な性質を持つものになった。

#### (3) 結核展覧会に投影された市民層の階級的規範

第三の成果としては、同じくヴィルヘルム期ドイツで繰り返し開催されていた結核展覧会に照準を合わせ、その活動の具体的内容を分析したものがあ(雑誌論文、学会発表)。1882年にロベルト・コッホが結核菌の発見を報告して以降、当時最大の死病であった結核は医学的には感染症として定義し直されることになった。だが大衆に向けてそうした結核の感染ルートや予防対策を指南する場となった結核展覧会では、主たる感染源を労働者の住環境や飲酒等の生活文化に求め、結核の予防のために市民的規範の習得が求められた。それまでも統計上、結核死亡率は所得が低いほど高くなるという特徴的な偏向を示すことは知られていたが、こうした啓蒙メッセージにあってはその偏向が市民層の生活様式の正当性を裏づけるものと解釈され、結果として結核は市民層の生活文化を労働者住宅の中に浸透させるための、階級戦略上のツールとして機能するようになった。従って、結核撲滅を目指した衛生啓蒙運動は、他の公衆衛生運動と同じく、あるいはそれ以上に階級性を強く刻印されていたと言える。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

村上宏昭、ヴィルヘルム期ドイツの反結核啓蒙運動　ドイツ結核撲滅中央委員会を中心に、筑波大学地域研究、査読有、第39号、2018、91-108

村上宏昭、ドイツの過少人口恐怖とスラヴの洪水　大戦間期の不安と憧憬、社会文化史学、査読有、第60号、2017、48-64

村上宏昭、衛生のアミューズメントパーク　ドレスデン国際衛生博覧会(1911年)の啓蒙戦略、歴史人類、査読有、第44号、2016、83-105

### 〔学会発表〕(計2件)

村上宏昭、結核展覧会と市民の美德　20世紀初頭のドイツにおける衛生啓蒙運動、第68回日本西洋史学会、2018-05-20

村上宏昭、ヴィルヘルム期ドイツの反結核啓蒙運動、第53回社会文化史学会、2017-09-23

### 〔図書〕(計1件)

村上宏昭、英霊礼讃　戦死の神話化と戦争の享楽、伊藤純郎・山澤学編著、破壊と再生の歴史・人類　自然・災害・戦争の記憶から学ぶ、査読有、筑波大学出版会、2016、113-134

### 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
特になし  
6．研究組織  
特になし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。